

小学校体育科における内容領域の検討

久留航太（熊本大学）

【緒言】

技能習熟に重きを置くとされる学習指導要領に対し、教科内容の構造化が求められている。しかし、小学校体育での議論はあまりなされていない現状がある。また、小学校体育では「知的学習」が明確に位置付けられていないため、「わかる」ことよりも「できる」ことが重視されている可能性がある。そこで本研究では、これまでの学習指導要領や体育の内容領域についての研究を乗り越え、小学校体育科における内容領域を検討していく。

【研究方法】

本研究では、学習指導要領、体育・スポーツに関する文献及び先行研究等を211収集し、分析検討を行った。4章では、体育授業実践を収集し、小学校で扱うべき内容領域とその具体的中身の抽出を図った。

【1章 小学校体育授業における課題の検討】

小学校学習指導要領において体育の内容は運動種目（スポーツ種目）6領域で構成されており、「技能主義体育」が行われている可能性がある。これに対し、体育で教えるべき「何か」を明確にし、教材選択をすることが重要であろう。また、小学生でも実技と講義の両方で学ぶべき知識があることが示唆された。

【2章 体育科教育の目的についての検討】

表1 指導要領と各研究者における体育科教育の目的

小学校学習指導要領	「新体育」「生活体育」期	「運動経験を通しての民主的人間の形成」
	「体力づくり体育」期	「運動による体力づくりを通しての健康的な体力づくり」
	「楽しい体育」期	「運動を通しての楽しさの追求と生涯に渡ってスポーツに親しむ能力と態度の育成」
中村敏雄		「運動文化の継承・発展に関する科学を教えるもの」
草深直臣		「スポーツの諸権利を行使しうるような具体的諸能力の基礎を保証すること」
出原泰明		『みんながうまくなること』を教える」
高橋健夫		『スポーツに自立する人間』の形成」
岡出美則		『意味』経験を保証すること」

これらを踏まえた上で、筆者は体育科教育では「生涯に渡って様々な形でスポーツに関わっていくために必要な諸能力の育成」が目的とされるべきであるという考えを示す。小学校においては、それらの「基礎」が育成されることを目的にするべきという考えも合わせて言及しておく。

【3章 体育における内容領域の検討】

作成者	内容領域
文科省（現行小学校学習指導要領体育編）	① 体づくり運動 ② 器械運動系 ③ 陸上運動系 ④ 水泳系 ⑤ ボール運動系 ⑥ 表現運動系
中村（1973）	①歴史領域 ②技術領域 ③組織領域
草深（1980）	①技術性 ②組織性 ③社会性
出原（1992）	①「スポーツ文化の発展」論 ②競争・勝敗 ③技能、技術、戦略、戦術
高橋（1978）	①スポーツ技術 ②スポーツの科学的知識 ③スポーツの社会的行動規範
岡出（1993）	①身体と関わる知識・技術 ②人と関わる知識・技術 ③社会現象としてのスポーツに関する知識・技術

これらを踏まえ、筆者は小学校体育科における内容領域を①技術領域、②組織領域、③社会領域、そしてすべての領域に含まれるとされる④歴史領域とする。

【4章 小学校体育科における内容領域の検討】

本章では、これまでの研究に加え、小・中・高の授業実践で扱われた内容及び体育・スポーツに関する文献等を踏まえ、内容領域の具体的中身の選定を行った。はじめに、技術領域の具体的中身として①表現、②作戦・戦術、③技術の分析・総合、④技術の系統性を選定した。次に、組織領域の具体的中身として①協同・交流、②鑑賞、③集団観、④合意形成、⑤運営を選定した。最後に、社会領域の具体的中身として①マナー（スポーツマンシップ）、②ルール、③競争・勝敗、④平等・公平を選定した。すべての領域に含まれるとされる歴史領域において、技術領域では技術の発展の歴史を取り入れられると考える。小学校体育の授業では、フラッグフットボールやサッカー等で実際に戦術の発展過程を体験させる授業を行うことが可能だと考える。組織領域では、これまでのスポーツ組織の歴史、特にオリンピックの歴史などが含まれるであろう。社会領域では、ルールの歴史等を取り入れられると考える。

また、小学校体育科における内容領域の具体的な中身を検討する際に、「適時性」や「授業形態」を考慮する必要性が考えられる。

最後に、小学校体育での教科横断型学習の可能性についても言及しておきたい。小学校では、中学校・高校の教科担任制とは異なり学級担任制が主流である。したがって、体育の授業と関連させて社会や理科の授業を行うというような複数教科にわたっての授業展開が行いやすいと推察できる。